

## 大阪部会50年を迎えて

シャープ株式会社  
法務部  
(大阪部会主査)

山形知彦 (Tomohiko Yamagata)

### 1 「これぞ経営法友会」と感じられるどこか懐かしい光景

現在は何事もリモートで行われることが一般的になりましたが、昨年11月24日に開催された「大阪部会50周年記念シンポジウム」で、会場の定員100席が埋め尽くされている様子を見た瞬間の感想です。

私は2022年に大阪部会主査に任命され、まずは大阪部会の歴史を振り返り、この任期中に何をすべきかを考えたところ、2023年が50年の節目であることに気づきました。この巡り合わせに感謝するとともに、50年目の大阪部会の姿を後世のために記録に残しておかなければ、と勝手な使命感が沸き上がりました。そして、すぐさま大阪部会および事務局にこの記念（記録）企画を相談し、その後幹事会での承認を経て、2023年度の事業計画に掲げました。

約1年半の長い期間をかけて構想を練り上げ、実現した渾身のシンポジウムの詳細は、本号および次号で掲載されていますので、そちらに譲るとして、本稿が本誌600号という節目であることも何かのご縁と考え、この場を借りて、大阪部会の半世紀を振り返りつつ少しご紹介させていただきます。

### 2 会員168社の中での大阪部会発足

大阪部会は、関西地域を始めとする地方会員への対応を目的として、経営法友会設立2年後の1973年5月に3社を幹事として選出し、発足しました。

当時の経営法友会の会員は168社でした。関西地域の会員数がどの程度あったのかは定かではありませんが、当時から法務拠点は東京中心という中で、東京での活動とほぼ同様に、かつ

関西地域の特性を踏まえて企画運営に努めていました。現在、経営法友会の会員は1400社を超える規模となり、法務拠点もさらに東京に集中していますが、幹事4名・運営委員11名の合わせて15名で、地域会員の交流機会を積極的に展開していくというミッションを加えて事業に取り組んでいます。

なお、大阪部会のあらし、活動実績等については、これまでも本誌で詳しく紹介されています（玉置秀司「大阪ならではの会員サービスを求めて」本誌500号23頁、齋藤憲道「大阪部会の歩み～経営法友会の新たな展開への期待～」本誌576号48頁、多田晶彦「大阪部会の活動と今後の課題—『企業活動の法律知識』の完成によせて—」本誌224号3頁など）。本誌のバックナンバーはHPからご覧いただけますので、ぜひこちらもご一読ください。

### 3 企画の端緒は経営法友会の温故知新

50周年企画と掲げたものの、さて何をするのか、その具体的な内容を考えるために、これは大阪部会に限らず先人達の残した記録を掘り起こすことから始めました。経営法友会発足の経緯、周年記念の座談会や歴代大阪部会主査の寄稿などを、幹事会出席の東京出張と合わせて、事務局のある公益社団法人商事法務研究会のライブラリーで50年以上にわたる記録を読み漁りました。

記録を読み進めると、いくつかの共通するキーワードが浮かび上がりました。たとえば、「法務組織の確立、地位向上」「法務部門の充実強化、専門性向上」「経営・事業への貢献」「法務担当者の実力の涵養」などは、それぞれ時代や場面も異なり、執筆者や発言者もさまざまなのですが、50年前から現在まで変わらず存在していることを再認識しました。もちろん法務部門は確実に成長・進化を遂げていますが、同時に各時代の法務を取り巻く課題も変化しゴールも先に移動し続けるため、これらは永遠のテーマといってもよいのかもしれませんが。

永遠のテーマに対する解はないのですが、本音ベースでの意見交換、場合によってはオフレコであったり、飲み会の席上であったり、経営法友会の活動を通じてヒントを得ることができた、ということもよく聞かれる話です。私自身もこれまで、いろいろと助けていただきました。

#### 4 メインテーマ決定に至った一言

大阪部会の50年を記念（記録）するにあたり、歴代の大阪部会主査にご登壇をお願いすることにしました。その依頼の席上で、『経営法友会でさまざまな貴重な経験ができたのは幅広い人脈が形成できたからであり、“人脈は重要”』である旨のお話がありました。「経営法友会は会員相互の情報交換の場としてこそ最も意義がある」という趣旨です。

この言葉はとても印象的でした。情報交換をするためには「人脈を形成」することが不可欠であり、人脈こそが経営法友会活動すべての土台になるものではないかと考え、パネルディスカッションのテーマも「人と人とのつながり」「人脈の重要性」にしたいと考えるに至りました。

この数年は、コロナ禍で人と人とのつながりが皆無になってしまったこと、とりわけ新入会員の皆さんには他社との接点がほとんどないこと、人材の異動サイクル（転職を含む）が短くなっており法務経験年数も短い方が増えている

ことなどが、経営法友会の事業運営上の課題でもありました。

「人脈は重要」との言葉は、法務分野の諸課題や法務組織、人材育成など、先ほどのキーワードと直接結びつかず、違和感を覚えられるかもしれません。しかし、これこそ今回の企画で会員の皆さまと共有すべきもの、共有したいものと考え、メインテーマとし、さまざまな経営法友会の事業への理解を深めていただく場も兼ねてということで、代表幹事も交えたパネルディスカッションとした次第です。もちろん、「大阪部会らしさ」を追求し、随所に盛り込むことも重要ミッションとしました。

#### 5 シンポジウムを終えたその先

「大阪部会50周年記念シンポジウム」は、久しぶりの大規模イベントでしたが、これまで経験したことのない、一種異様と言っても過言ではないほど熱気に溢れたイベントになりました。「大阪部会らしさ」を言葉で説明するのは難しいですが、基調講演での「ごちんまりした所帯だからこそ一体感」「関西ならではの“ノリ”」や、パネルディスカッションでの「ユニークネス」との形容は実在の射た素晴らしい表現であると感心しました。存在意義を示すためのよい意味での反骨心のようなものかもしれませんが、「大阪部会らしさ」は今後も脈々と引き継がれていくことを期待します。これから先10年、30年、そして50年後の100周年記念の際に、本稿が過去の記録として少しでも参考になれば嬉しく思います。

最後になりましたが、今回の記念企画においては、大阪部会幹事・運営委員の皆さんには通常の部会運営に加えてのご協力のほか、当日大阪まで駆けつけていただいた公益社団法人商事法務研究会および株式会社商事法務の方々、そして経営法友会事務局長（当時）飯泉拓野氏や大阪事務所加藤拓真氏を始め、事務局各位のプロフェッショナルな対応があって実現することができました。深く感謝いたします。